

『辞典語辞典』正誤表

本書初版に以下のとおり間違いや追加箇所がございます。
お詫びして修正・変更させていただきます。

ページ・項目名	行など	修正・変更前	修正・変更後
2ページ	4、5行目	681項目	682項目
3ページ	4行目	681	682
7ページ「赤瀬川原平」	1行目～3行目	『▼新明解国語辞典』の個性を論じたエッセイ『▼新解さんの謎』はベストセラーとなった。	『超芸術トマソン』『老人力』や、芥川賞を受賞した「父が消えた」（尾辻克彦名義）などで知られる。その独自の観察眼で『▼新明解国語辞典』の面白さを紹介したエッセイ『▼新解さんの謎』（1996年）はベストセラーとなり、辞書を読む楽しみを世に知らしめた。学生時代には『新明解国語辞典』の前身にあたる『▼明解国語辞典』を、上京後は『▼岩波国語辞典』を使っていたという。1997～1998年には、『▼三省堂ぶっくれっと』誌で『新明解国語辞典』の編者のひとりである▼柴田武、劇作家の如月小春と鼎談を行ってゐる。
7ページ囲み「辞書特有の言い回し①」		「～の一。」	71ページに移動しました
7ページ「赤目四十八瀧心中未遂事件」			新たに立項しました
12ページ「市川孝」	下から4行分	見坊没後の第5版では編集幹事を務めた。同書の弟分にあたる『三省堂現代国語辞典』『▼三省堂現代新国語辞典』でも第4版まで編集主幹。	見坊没後の第5～6版では編集幹事を務め、表記欄において「仮名書きにして（も）よい」箇所を括弧でくる方法を創案。同書の弟分にあたる『三省堂現代国語辞典』では編集主幹、『▼三省堂現代新国語辞典』では第4版まで編集主幹。
14ページ「井上ひさし」	1行目	放送作家、小説家、劇作家。	作家、劇作家。
26ページ「小野正弘」	1行目	言語学者	国語学者
33ページ「火事」	5行目	池の庭	庭の池
34ページ「数え方」	1行目～7行目	ものの数がいくつあるかを言い表すときの言葉。『▼新明解国語辞典』で第4版から語釈の末尾に「かぞえ方」欄として示されるようになった。『▼新解さんの謎』で赤瀬川原平らは「火炎瓶」に「一本」、「恐竜」に「一匹」などの例を挙げて「変だけど正しい」と面白がっている。	ものの数を言い表すときの言葉。『▼新明解国語辞典』で第4版から語釈の末尾に「かぞえ方」欄として示される。▼赤瀬川原平・SM君は『▼新解さんの謎』で、「火炎瓶」に「一本」、「恐竜」に「一匹」などの例を挙げて「変だけど正しい」と評した。
40ページ「北原保雄」	1行目～6行目	『古語大辞典』『全訳古語例解辞典』『日本語逆引き辞典』『▼明鏡国語辞典』『明鏡ことわざ成句使い方辞典』などで編者を務める。▼「もっと明鏡」大賞では審査委員長を務め、『みんなで国語辞典』シリーズも監修。	師の中田祝夫に誘われて1963年頃から『古語大辞典』（1983年）の編纂に参加して以来、多数の辞書の編集に携わる。『全訳古語例解辞典』（1987年）では▼古語辞典における全訳方式を創始し、『日本語逆引き辞典』（1990年）では初めての本格的な▼逆引き辞典を生んだ。1988年から本格的な編纂が始まった『▼明鏡国語辞典』でも編者を務め、規範を説明した上で記述的な立場も取り入れる方針を導入。▼「もっと明鏡」大賞では審査委員長となり、成果を『明鏡国語辞典』に反映するとともに、『みんなで国語辞典』シリーズも監修した。このほか『反対語対照語辞典』『同音語同訓語使い分け辞典』『明鏡ことわざ成句使い方辞典』などで編者。『▼日本国語大辞典』第2版では編集委員。ベストセラーとなった『問題な日本語』シリーズでも知られる。
41ページ「逆からブランチ」	3行目	第8回	第7回
44ページ「金田一秀穂」	1行目	言語学者、タレント。	日本語学者、杏林大学教授。
49ページ「言海」	右段13行目	縮刷、	削除しました

55ページ「広辞苑」	17行目～26行目	1969年刊の第2版からは、戦前『辞苑』改訂に携わった新村の次男・▼新村猛が編集に加わり、編者側が▼語源・▼語誌・▼外来語を、書店側がその他の百科・国語項目を担当するという形で契約された。1983年刊の第3版は、国語部門を新村出遺著刊行会（後に新村出記念財団に改組）で、百科部門を書店側で担当することとし、国語部門の総括責任者に金岡孝がついた。	1969年刊の第2版からは、編者側が▼語源・▼語誌・▼外来語を、書店側がその他の百科・国語項目を担当するという形で契約された。1983年刊の第3版は、 新村出遺著刊行会（後に新村出記念財団に改組）と書店が協同で改訂に当たることとし、 国語部門の総括責任者に金岡孝がついた。
同	下から5行目～下から2行目	第4版では新村出記念財団が編集の全責任を負い、財団と岩波書店とが参加する「編集委員会」が編集する形となり今日に至る。	第4版では新村出記念財団内に設けられた、 岩波書店の担当者も参加する「刊行委員会」 が責任を負う形をとった。 以後も財団と書店が協同で改訂に当たりつつ 今日に至る。
同	右段「参考」		「新村猛」を加えました
58ページ「小型」	4行目	B6版	B6判
60ページ「国語辞典ナイト」	6行目	翌年	2016年
66ページ「ことばの泉」	5行目	1898年	1899年
71ページ囲み「辞書特有の言い回し①」	「～の一。」		7ページから移動しました
71ページ囲み「辞書特有の言い回し②」		「またその〇〇。」	文章を修正のうえ、121ページに移動しました
80ページ「辞書」	右段8行目末～9行目頭	発音・	削除しました
98ページ「新解さん」	1行目～11行目	『▼新解さんの謎』の中で▼夏石鈴子がつけた『▼新明解国語辞典』の愛称。魚が好き、世の中をさめた目で見苦勞人、出版に厳しいとされるが、これらの指摘がごとく当たっているかどうかは別問題。その後、『新明解国語辞典』のファンや、同辞書の面白さを扱う記事などでもよく使われるあだ名となった。なお、版元の▼三省堂自身は『新明解国語辞典』を「新解さん」とは呼ばず、「▼新明国」と略称する。そのため辞書マニアもしばしばそれにならう。	『▼新解さんの謎』の中で、 担当編集者・鈴木真紀子 がつけた『▼新明解国語辞典』の愛称。魚が好き、世の中をさめた目で見苦勞人、出版に厳しいと 評価される 。その後、新明解国語辞典』のファンや、同辞書の面白さを扱う記事などによってもよく使われるあだ名となった。なお、版元の▼三省堂自身は『新明解国語辞典』を「新解さん」とは呼ばず、「▼新明国」と略称する。 参考 → 鈴木マキコ
99ページ「新解さんの謎」	2行目～5行目	『文藝春秋』編集部員だった▼夏石鈴子が企画して1992年7月号に掲載された「フシギなフシギな辞書の世界」がエッセイ第1章の初出。	『文藝春秋』編集部員だった 鈴木真紀子 が企画して1992年7月号に掲載された「フシギなフシギな辞書の世界」がエッセイ第1章の初出。
同	7行目～13行目	エッセイでは、赤瀬川が「SM君」こと夏石とともに『▼新明解国語辞典』第4版に現れる独特の語釈や用例の妙を味わうなかで、「▼新解さん」の人格を見いだしていったり、『新明解国語辞典』を映画化・テーマパーク化したりする。単行本は1996年発売で、20万部超のロングセラーとなった。	エッセイでは、赤瀬川が SM君（イニシャルから、同書における呼び名） とともに『▼新明解国語辞典』第4版に現れる独特の語釈や用例の妙を味わうなかで、「▼新解さん」の人格を見いだしていったり、『新明解国語辞典』を映画化・テーマパーク化したりする。単行本は1996年発売で、20万部超のロングセラーとなって『 新明解国語辞典 』の面白さ、ひいては「 辞書を楽しむ 」という概念を世に広めた。
同	「参考」		「鈴木マキコ」を加えました
101ページ「新潮国語辞典」	4行目～5行目	1982年新装改訂版。	1982年新装改訂版、1995年第2版。
101ページ「新村出」	1行目（生年）	1867	1876
同	5行目～18行目	1930年、岡書院の▼岡茂雄に国語辞典の企画を持ちかけられ、教え子の▼溝江八男太を紹介し編集主任に当たさせた。同時期、『▼大言海』の仕上げにも参画。1933年には講演「▼日本辞書の現実と理想」を行った。溝江の辞書は1935年に『▼辞苑』として成立し、編者として名義を貸す。その後も溝江に『▼言苑』『▼言林』『▼新辞林』など複数の国語辞典を編集させた。戦後には『辞苑』の改訂に関する協定を▼岩波書店と結び、1948年、▼市村宏を主任とし編集がスタート。1955年に『広辞苑』として成立した。新村はしばしば市村に助言を与えたという。	1930年、岡書院の▼岡茂雄に国語辞典の企画を持ちかけられ、教え子の▼溝江八男太を紹介し編集主任に当たらせ、 編纂を監督 。これが 1935年に『▼辞苑』として成立した 。同時期、『▼大言海』の仕上げにも参画。1933年には講演「▼日本辞書の現実と理想」を行っている。その後も溝江に『▼言苑』『▼言林』『▼新辞林』など複数の国語辞典を編集させた。戦後には『辞苑』の改訂に関する協定を▼岩波書店と結び、1948年、 ▼市村宏を主任としたスタッフを雇って編集部を発足 。新村は市村に 随筆集『松笠集』を贈って編纂を託し、市村からの幾度もの相談には必ず応じたという 。。1955年、 同辞書は『広辞苑』として成立した 。
同			イラストを修正しました

102ページ「新村猛」	5行目	『▼広辞苑』初版には関わらなかったが、第2版から再び編集に参画。	戦後も引き続き『▼広辞苑』の編集に参画し、
105ページ「鈴木マキコ」	1行目	→夏石鈴子	作家。「新解さん友の会」会長。著書にリトル・モア刊『新解さんの読み方』。以前の筆名は「▼夏石鈴子」で、詳しくは同項を参照。
108ページ「千言万辞」	2行目	シーズン13	シーズン17
121ページ「帝国大辞典」	右段1行目	明治堂	明法堂
同	右段2行目	版權	改訂原稿
121ページ囲み「辞書特有の言い回し②」	「またその〇〇。」		字数の圧縮に用いる辞書的表現。『広辞苑』で「意匠」を引いてみると、「美術・工芸・工業品などの形・模様・色またはその構成について、工夫を凝らすこと。また、その装飾的考案」とある。最後の「その」に圧縮された意味をどう読み下すべきか、少し悩ましい。本書でも数項目で使っているのでは、お暇なら探してみてください。
121ページ囲み「辞書特有の言い回し③」		「多く～」	145ページに移動しました
128ページ「中村明」	4行目～11行目	『三省堂類語新辞典』では主幹。『日本語表現活用辞典』『たとえことば辞典』『日本語語感の辞典』『日本の作家名表現辞典』『比喩表現辞典』『日本語の文体・レトリック辞典』『日本語文章・文体・表現事典』『笑いの日本語事典』『文章を彩る表現技法の辞典』『類語ニュアンス辞典』など、驚異的な種類の▼表現辞典を著している。	『日本語文章・文体・表現事典』『三省堂類語新辞典』の主幹。『日本語表現活用辞典』『比喩表現辞典』『感情表現辞典』『人物表現辞典』『日本語語感の辞典』『日本の作家名表現辞典』『日本語笑いの技法辞典』『日本語の文体・レトリック辞典』『文章を彩る表現技法の辞典』『類語ニュアンス辞典』など、驚異的な種類の▼表現辞典を著している。
128ページ「ナゼー」	4行目	PV	MV
129ページ「夏石鈴子」	3行目	『文藝春秋』の編集者として▼赤瀬川原平に『▼新明解国語辞典』のエッセイを依頼した「SM君」その人で、愛称「▼新解さん」の命名者である。	『文藝春秋』の編集者として▼赤瀬川原平に『▼新明解国語辞典』のエッセイを依頼した「SM君」その人で、 本名のイニシャルからこう命名されていた。 愛称「▼新解さん」の命名者である。
同	最終行		「参考→赤目四十八瀧心中未遂事件」を加えました
同		イラスト削除	著書の書影を掲載しました
130ページ「夏の陣」	最終行	校正作業「冬の陣」も行われた。	校正作業「秋の陣」（「冬の陣」とも）も行われた。
133ページ「日本国語大辞典」	5行目	1954年から1956年にかけては	1979年から1981年にかけては
142ページ「飛田良文」	1行目～15行目	J・C・▼ヘボンの『▼和英語林集成』に触れたのをきっかけに辞書の道へ入ったという。1966年から▼国立国語研究所に所属。近代語研究室長の職にあった1977年、▼林大の命で、全時代の日本語を収集する国語用例辞典『日本大語誌』プロジェクトを担当した。『日本大語誌』は1988年に中断したが、『▼角川国語中辞典』、『▼日本国語大辞典』、『明治大正新語俗語辞典』、『明治のことば辞典』、『日本語百科大辞典』、『▼三省堂国語辞典』（第4版から）、『▼大辞泉』など多数の辞書へ参加している。『▼明治期国語辞書大系』では編者代表を務めた。編書に『国立国語研究所「日本大語誌」構想の記録』。	『▼和英語林集成』に触れたのをきっかけに辞書の道へ入ったという。1966年から▼国立国語研究所に所属。近代語研究室長であった1977年、▼林大により、 全時代の日本語を収集する国語用例辞典『日本大語誌』プロジェクト担当に任命される。準備室発足の1979年当初は副主幹（後に主幹）として事業を牽引、1988年の編集室開設後も責任者を務めた。成果は編書『国立国語研究所「日本大語誌」構想の記録』と『別冊「日本大語誌」計画作業の思い出』にまとめられている。編著書に『▼角川国語中辞典』『▼日本国語大辞典』『▼大辞泉』『▼三省堂国語辞典』（第4版から）や、『明治大正新語俗語辞典』『明治のことば辞典』『日本語百科大辞典』『日本語・中国語意味対照辞典』『現代日葡辞典』『日本語学研究事典』など多数がある。『▼明治期国語辞書大系』では編者代表。
142ページ「人の世や嗚呼にはじまる広辞苑」			143ページに移動しました

143ページ「美味」		『▼新解さんの謎』で『▼新明解国語辞典』が「美味」「うまい」「おいしい」とする項目が取り沙汰されて以来、同辞書に特徴的な表現とみなされてもいるが、事実ではない。多数の国語辞典が赤貝、鴨、鯛などを味が良いものと説明してきており、『▼言海』が伊勢海老をエビのうち「味最モ美ナルモノ」とするのはその一例。参考 → 主観	『▼新解さんの謎』で『▼新明解国語辞典』の「美味」「うまい」「おいしい」とする項目が取り沙汰されていたのはつとに有名。そのおかげで、同辞書に特徴的な表現と考えられがちだが、実は多数の国語辞典が赤貝、鴨、鯛などを味が良いものと説明してきている。『▼言海』が伊勢海老をエビのうち「味最モ美ナルモノ」とするのは、そのほんの一例。参考 → 主観
145ページ「平木靖成」	8行目	実務で『▼広辞苑』全体に目を通した経験から、あらゆる物事が雑多に同居する同書を「鶴（ぬえ）」にたとえている。	削除しました
149ページ「舟を編む」			イラストを削除しました
165ページ「名義貸し」	7行目	他にも	類例として
同	9行目	存在がわかっている辞書	存在が大きかったことのわかっている辞書
同	11行目	これに	削除しました
165ページ「明鏡国語辞典」	2行目～10行目	初版は2002年で、大修館書店にとっては1963年の『新国語辞典』以来約40年ぶりとなる国語辞典である。第2版は2010年刊、項目数7万。基本的な用言や助詞・助動詞の意味の記述に詳しく、よくある▼誤用や気になる表現を多数取り上げているのが特徴。▼新語・▼俗語の▼立項も多い。別冊▼付録に『明鏡 問題なことは索引』2020年12月、第3版が発売予定。	初版2002年。最新版は2021年の第3版で、項目数7万3000。構文の観点を取り入れ、基本的な用言や助詞・助動詞の意味の記述に詳しく、よくある▼誤用や気になる表現を多く取り上げているのが特徴。▼新語・▼俗語の立項も多い。第3版では、改まった場面で用いることのできる言葉を挙げた「品格」欄などを新設した。1986年、▼学習研究社の鳥飼浩二が新機軸の国語辞典の編纂を北原に持ちかけ企画が進んだが、中止。1988年、北原がかねて付き合いのあった大修館書店に企画を持ち込み、鳥飼、矢澤真人、小林賢次、砂川有里子が参加して同社で編集が始まった。書名も北原が考案。大修館書店にとっては1963年の『新国語辞典』以来約40年ぶりの国語辞典となった。
165ページ「明治期国語辞書体系」			166ページに移動しました
167ページ「森田良行」	下から5行目	『助詞・助動詞の事典』	『助詞・助動詞の辞典』
173ページ表内	有名項目の内訳	作品：16	作品：17
173ページ表欄外		見出し語の総数は664	見出し語の総数は665
同		総項目数は681	総項目数は682
※上記の修正に伴い、索引も修正しております。			